

松本亨の虚像と実像：国際文化学的アイデンティティ分析の試み

武市，一成 / TAKECHI, Issei

(発行年 / Year)

2013-12-19

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第322号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2013-09-15

(学位名 / Degree Name)

博士(国際文化)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009299>

法政大学審査学位論文の要約

松本亨の虚像と実像—国際文化学的アイデンティティ分析の試み—

武市一成

本論は、今日日本で専ら英語教育者としてその名を知られる松本亨（1913 - 1979）を国際文化学の枠組みで論ずる試みである。一般に学術研究において人物を扱う場合、その仕事は大抵歴史学に委ねられることが多い。バイオグラフィーとして認知されている領域がそれである。この場合のバイオグラフィーとは、日記、自伝的書物、書簡等の第一次史料にもとづいて、その人物の歩んだ人生を継時的に再構築し、歴史的な意味づけを行う作業であると要約できる。本論も、学的基礎として、松本亨本人のみならず、彼と直接間接関わりを持った多くの人物によって残された、多種多様な一次史料に立脚したものであり、歴史学的手法がその基礎にある。「実証性」を伴わない議論は、客観性を欠くのであり、およそ学術研究たり得ない以上、このことは当然である。しかしながら、本論が、国際文化学博士号の取得要件として、国際文化研究科に提出されるものであってみれば、それは単に歴史学的考察を越えた、国際文化学としての特徴を有するものでなくてはならないと考える。

最初に、松本亨は、日本放送協会『ラジオ英語会話』の講師などを通じて、英語教育者として大成し、多くの学習者に影響を与えたが、その分野において、自らの方法論を体系的に理論化することはなく、専ら「技術」としての英語運用能力習得の分野で多くの信奉者を得た人物である。従って、明治期に英語の文法を体系的に理論化して纏め、要職にあつて公的にも大きな影響力を発揮し、今日辞書学、英学史、英語教育史等の分野で論じられることの多い斎藤秀三郎や、明治後期から大正期にかけて、日本の英語教育界の指導的立場にあつた英文学者岡倉由三郎などと同列に松本亨が論じられることはほとんどなく、またその必要もない。無論、斎藤秀三郎や岡倉由三郎とて、「実用」と無縁ではないが、松本亨が、理論化、辞書編纂、英文学研究等と無縁の人物であつたことは確かである。従って、松本亨という人物の英語教育者としての側面を、斎藤秀三郎や岡倉由三郎と同じ地平で考察しようとしても、そもそも、課題設定自体がずれているのである。英語教育者としての松本亨は、占領後期から高度経済成長期の日本にあつて、実用的なレベルにおいて大きな影響力を発揮したのであり、まさにその地平から彼の存在や功績の社会文化的意味が考察されるのでなくてはならない。日本における英語教育を歴史的に考察する分野は、主に英語教育史や英学史であるが、前者にあつては、国民国家としての枠組みを前提に人物が論じられる場合が多く、また後者にあつては、「英学」という呼称が示すように、明

治期に活動した教育者や文学者が主な研究対象であり、松本亨のような人物を取り扱う試みは、その緒に就いたばかりである。

第二に、松本亨は、政治的に枢要な位置から国家の政策に直接的に大きな影響を及ぼす立場にあった人物ではない。従って、外交史の文脈で松本を扱うのは原理的に困難である。また、松本は、1936年から1949年までアメリカに滞在したが、移民としてアメリカに居住したわけではなく、また、そのような意識を持っていた形跡もない。よって、従来の移民史の枠組みで論ずることも難しい。また、松本亨はキリスト者であったが、日本の教会組織の中核で指導的影響力を行行使したわけではなく、キリスト教宣教史の文脈のみで論ずることも困難である。要するに、松本亨という人物は、世間一般に言う、「偉人」「要人」「傑物」の類では全くない。しかし、日米交渉史の観点からは、生涯を通じて、極めて多様な領域で足跡を残した人物であり、それゆえ、彼のような人物を考察する場合、学際的な視点が不可欠である。

第三に、本論は松本亨を通じて日米関係を述べるものではありえず、日米関係を背景に松本亨を論ずる試みである。そうでなければ、松本亨をわざわざ取り扱う意味がないからである。これは、松本亨という個人のアイデンティティに関わる問題である。松本が、元来文学的な傾向が強く、極めて自己表出的な人物であったことは明白であり、それゆえ、松本亨を「英語教育者」と呼ぶことさえ慎重を要する。これは恐らく最も重要なことであるが、世評とは裏腹に、松本は、「英語教育者」としての自らの立ち位置に、本来の自分をみていなかった可能性さえあると考えられる。従って、実用英語放送に関わり、実用英語学習書を書くことは、松本亨の重要な「仕事」ではあっても、彼の「本質」であったとは俄かに断じ難い。無論、これを持って、英語教育者としての松本亨の社会的意義や重要性がいささかも減ずるわけではない。そもそも、アイデンティティなる概念は、個人にある種の統一的意識を要求するものであるが、個人の自己認識と社会的アイデンティティが同一であると考えられる根拠はどこにも存在せず、松本亨という人物を考える場合、この点は特に重要である。このような、個人の自己同定に関わる複雑な様相を考察する場合にも、国際文化学の視点は有用である。

これらの理由から、本論を展開するに当たっては、歴史的史料を基礎としながらも、松本亨という個人も含めた文化の問題を幅広く考察する学際的視点が必要であり、国際文化学が、方法論的にも有効であると考えられる。

第1章では、人間が生まれ出る最初の社会環境が家族であることから、松本亨に多大な影響を与え、また、彼にとって、人生最初の異文化体験でもあった、母親松本タマとの関係を主に考察する。

第2章では、日米関係史の文脈で松本亨を考察する。歴史学にせよ、政治学にせよ、二国間関係(bilateral relations)は、その多くが政治的関係を中心に考察されてきた。すなわち、二国間関係を、権力政治の発動たる政府間関係として捉える見方である。従って、

本章では、日米関係を、従来のパワーバランス的なリアリズムの立場からではなく、国際秩序を希求する文化史的な側面から考察した。第 2 章の主な目的は、学生キリスト教運動 (Student Christian Movement [SCM]) の分野で、日本人学生を代表する立場で活動した、松本亨の軌跡を追うことにあるが、SCM が、キャンパス横断的な超教派的運動であり、戦後の国際連合結成への思想的基盤をなした、リベラルな自由主義神学を根拠に持っていたことを考えれば、戦間期から戦後にかけて、YMCA や YWCA が果たした役割の考察は欠かない。戦前、YMCA の指導下に、海外留学生によって構成される下部組織が結成されたが、松本亨は、そのひとつである、北米日本人基督教学生同盟 (Japanese Student Christian Association [JSCA]) の総主事として活動した。日本が国家主義に傾斜してゆく中、アメリカの民間団体は、国際主義の方向を模索しており、学生キリスト教運動は、超教派主義的なリベラリズムに基づき、国境を越えて連帯する志向性を有し、そのような国際主義の重要な一翼を担っていた。松本亨という人物は、明らかに、超教派主義的な理念に共鳴したが、現実の国際関係に生きた主体として見た場合、単純にアメリカ的覇権主義の体現者としてカテゴリー化することは困難である。JSCA については、この組織が、戦前アメリカにおける日本人学生の互助機関として重要な役割を担った存在であったにも関わらず、これまでまとまった研究は提出されていない。よって、JSCA における松本の活動の論述については、YMCA の下部組織、外国人留学生友好委員会 (The Committee on Friendly Relations Among Foreign Students [CFRFS]) の定期刊行物 *The Unofficial Ambassadors* や、JSCA の定期刊行物 *The Japanese Student Bulletin* 等に依拠した。第 2 節では、松本亨の強制収容と日米交換船について論ずる。第 3 節においては、オランダ改革派教会の、超教派主義者ルーマン・J・シェーファーと松本亨の関係を論ずる。シェーファーは、戦前フェリス女学院の院長を務め、戦後アメリカの教会を代表して、民間人として初めて日本を訪れるなど、日本と重要な関係を持った人物であるが、戦後松本を日本に送り返した張本人であるのみならず、シェーファーの存在なくしては、松本が、日系人転住委員会 (Committee on Resettlement of Japanese Americans) の主事として活動することも、オランダ改革派教会の教職に就くこともあり得なかったのであり、その意味で、シェーファーが松本亨の人生に与えた影響は絶大なるものがあり、よって、両者の関係は詳述に値する。

第 3 章においては、松本亨という人物が、戦時下のアメリカ社会でどのように表象されたかという問題を考察する。第 1 節では、松本亨一家が営んでいたビクトリーガーデンが破壊された事例を挙げ、この事件に対する、コミュニティの反応を、新聞資料等に依拠して分析する。第 2 節及び第 3 節では、本論の核心とも言える、*A Brother Is A Stranger* を巡る諸問題の考察を行なう。*A Brother Is A Stranger* (New York, NY: John Day Company, 1946) は、太平洋戦争期にアメリカで出版された、数少ない日本人による出版物のうちの一つである。本節では、*A Brother Is A Stranger* の出版を可能にした、松本亨を巡る環境的諸力に着目しつつ、この書物が、松本亨という人物を知る上で、極めて重要なテキストであることを明らかにする。

第4章第1節では、1949年に発表された *Toru's People* (日本の人々) と題する映像作品の分析を行なう。この作品には、アメリカの教会が、占領期の日本社会の民主化に対して持っていたイメージが映し出されているが、同時に、松本亨を語り手として作られたこの映像作品が、従順で民主的な日本人像を、アメリカ社会に広めるにあたって果たした役割を検討する。第2節では、1948年1月5日、松本亨と当時の読売新聞社長馬場恒吾の間に行なわれた電話対談を取り上げる。日本人同士による日米間の電話通話は、1941年11月5日以降途絶えていたが、これはGHQが許可した戦後初めての電話通話であった。このやり取りは、『読売新聞』の一面に掲載されたが、当時日本においては全く無名であったはずの松本亨と読売新聞社の社長との電話対談が行なわれた背後に、占領政策と教会の強い関係が見て取れる。この対談のキーワードは、「反共」であらうと思われる。当時、占領政策は、日本の民主化から、反共路線へと明確に「逆コース」を辿りつつあったが、松本の共産主義批判はかなり抑制的であり、松本亨は、所謂「反共主義者」と呼ぶほどの反共思想を持っていたとは思われない。そのことは、第3節で論じる、松本亨の民主教育案にも表れており、松本は、明治学院で民主教育を推進するにあたり、共産主義者を排除するのではなく、包摂する方向性で考えていた。そもそも、松本亨は、キリスト教の中でも、社会主義的要素が強い、社会的福音を思想的基盤に持つ、学生キリスト教運動 (SCM) の只中に身を置き、その理念に共鳴していたのであって、「排除」は、彼の思想から最も通いものであった。第3節では、松本亨が、コロンビア大学教育大学院において書きあげた、博士論文『明治学院における自由主義的教育プログラムに関する一考察』 (A Proposed Program of Voluntary Education at Meiji Gakuin, Tokyo, Japan) を考察の中心に据え、彼が母校の明治学院で実践しようとした「理想教育」の推進と挫折について論述する。

第5章では、英語教師としての松本亨が論じられる。今日、日本において、松本亨は、英語教師として記憶されており、それ以外ではない。従って、英語教師としての役割を閑却して、松本亨という人物を語ることは不可能である。日本において、英語教育を歴史的に叙述する試みは、専ら、英学史と英語教育史が担ってきた。両者は、時として分野が重なる場合があるが、前者は、幕末期から明治期における英語教育と、英語を通して、日本に流入してきた、制度、思想、学術等の研究を主な目的とするのに対し、後者は、辞書学、学校英語教育の変遷、教科書研究等に力点を置いており、戦後の事象も取り扱う。しかしながら、いずれの分野においても、「放送英語」と「実用英語」に関する研究は極めて手薄である。しかしながら、「教養」と「実用」は、一種の対立概念として、日本の英語教育史を貫く重要なテーマであり続けている関係上、明治期の実用英語の普及についてはかなりの研究蓄積が存在する。しかしながら、所謂「英会話」と呼ばれる分野が、学術研究の俎上に乗ることは極めて稀であり、専ら、戦後の大衆文化現象として一括される傾向があったと言える。従って、本論は、主に戦後、実用英語—なかならず、英会話—の担い手として多大な影響力を発揮した人物を正面から取り上げた、極めて稀な研究であると言える。そもそも、実用的な英語の普及は、どの時代においても、一種の「ブーム」とし

て扱われ、文学や思想に比して、永続的価値の低い、一過性の「熱」に過ぎないものとみなされる傾向がある。それでも、「放送英語」に関しては、数多くの論考が発表されている。しかし、それらのほとんどが、放送英語を学校教育の現場で活用する効果や方法論などについての現場研究や実験的研究であり、宇佐美昇三による、「英語教育番組略史一大正14年から昭和54年まで」『NHK放送研究年報』第25集、1980年8月が、「放送英語」を、その開始期からバブル期にかけて、系統的に研究した最初の纏まった論考であった。しかしながら、カルチュラルスタディーズの立場から、「実用」と「教養」の対立概念を批判的に検討し、戦前から戦後にかけての「放送英語」の変遷を跡付けた、山口誠の『英語講座の誕生－メディアと教養が会う近代日本』講談社選書メチエ（2001年）が登場し、斎藤一はこれに一部依拠して、『帝国日本の英文学』人文書院（2006年）を著わした。よって、本章の第1節及び第2節においては、山口誠が提示した、「教養」と「実用」の批判的分析を援用し、松本亨の戦前における英語体験を叙述する。英学史に対しては、ポストコロニアルな立場から、その文化相対主義的な性質に対して批判が加えられることがあるのであるが、戦前の日本の植民地主義を批判する立場の英語教育論者でさえも、グローバルズムに対する対抗言説の足場を、結局のところ、戦前の教養主義に求める傾向なしとしない。よって、本論は、松本亨という人物を、ポストコロニアルな枠組みに当てはめて論ずることを必ずしも行わず、むしろ、その限界をも明らかにしようとするものである。

本論は、あくまで、国際文化学として人物を扱う試みであるが、小坂井敏晶や上野千鶴子らによって提起されてきた、アイデンティティ・ポリティクスと本質主義の限界性が本論の底流にある。すなわち、松本亨という人物が、これまで、どのように受容され、また、どのように閉却されてきたのかを浮き彫りにすることにより、その背後にあって作用する社会力学にも光を当てたいと考える。よって、終章においては、松本亨という人物のアイデンティティを、自己認識と社会認識の両面から考察し、両者のズレを浮かび上がらせることにより、国際文化学の学的要請でもあるところの、文化本質主義を越えた地平に議論を開くものである。

以上